

クラス	Q305	担当教員	大饗 広之
テーマ	現代青年の心理と心理療法的アプローチ		
著書・論文	「豹変する心」の現象学、勁草書房、2009. 「二つの離人症―記述現象学的立場からの再考―」、精神神経誌、102、2001. 「解離と imaginary companion―成人例について」、精神科治療学、24、2007. 「分裂病者との対話―内的体験に先立って語られること」、精神神経誌、102、2000. 「＜中心＞のない多元化―アイデンティティー失効からアスペルガー症候群へ」、『解離の病理』所収、岩崎学術出版（2012） ほか		
研究課題等			
ゼミナール概要			
キーワード：現代青年、アイデンティティー、解離、トラウマ、アスペルガー症候群			
目的、内容、方法、授業計画等： 最近の内閣府の調査（H24）では「本気で自殺を考えたことがある」と答えた 20 代の人が 28.4%にものぼっていますが、いったい青年の心に何がおこっているのか？ それについてはほとんど明らかになっていないというのが現状です。そういった心の問題にとりくみ、それを解明していくのが本来の臨床心理学の使命ではないかと私は思うのですが・・・ まあ、そこでこのゼミでは青年期心理を中心に「生きづらさ」の背景にある対人関係、アイデンティティーの変容、あるいは解離、離人、アスペルガー症候群、摂食障害といった精神現象など、あまりテーマを限定せずにディスカッション形式で授業を進めていきます。ゼミは「生もの」であって議論を通して自分自身について考え、自分のテーマをしぼっていくという過程ですから、はじめからテーマが決まっている必要はありませんが、少なくとも疑問をいだいて積極的にディスカッションに参加する姿勢が求められます。 また、このゼミでは臨床心理学の基礎ともいえる「心理療法（カウンセリング）とは何か」というテーマについても各々が経験をつみかさねていくことをもう一つの柱の一つにしています（そのために種々のインタビューなどを試みていただくかもしれません）。とくに「心の専門家」がこの国ではなぜまともに機能していないのかということも意識しながら、臨床心理学や精神医学が抱えている問題について勉強していくことが大切です。 授業形態は参加者の要望や動機づけ、それぞれが持ち寄るテーマによっても変化します。先行研究の発表やゼミ生のあいだで討論や対話をくり返ししながら自分のテーマを深めていきます。			
担当教員からのメッセージ			
ゼミとは集団的な場で自分の意見を表出する、つまりある意味、自己開示の練習をする場ですから、そこでは互いがある程度、頭のネジをゆるめて、さまざまな角度から意見や感情を交叉させることが必要です。最初はいろいろ抵抗も生じるかもしれませんが、とにかくねばり強く参加し続けていれば徐々におもしろくなっていくというものです（保証はありませんが）。ディスカッションがおもしろく感じられるようになったとき、自分の考えや問題も深められていると思っていいでしょう。			